

嶋子とさくらの姫

序章 皐月の風

かみやまさなり  
神家正成



——馬上の姫は、美しい。

自身も常歩で歩く馬に揺られながら、天庵——小田氏治は思った。

皐月の風が、小袖に袴姿で笠を被っていない嶋姫の束ねた髪を揺らす。

栗毛の馬に跨がる、凜とした嶋姫の向こうには、紫の紫陽花が咲き誇っている。その先では、民たちが田植えに勤しんでいる。

どこからか雉の鳴き声が、聞こえてきた。

昨晚は嶋姫ゆかりの地である足利荘で愉快な時を過ごした。十騎ほどの供回りと共に、いにしえに東山道と親しまれた道を、東にのんびりと進んでいる。小山まで向かい、その後、古河城へと行くつもりだ。進む先には懐かしい筑波の嶺が、徐々にその姿を大きくしている。

同じような騎馬の一団が道の先を進んでいた。軍神と呼ばれた上杉謙信の猛攻を何度も跳ね返した佐野氏の居城、唐沢山城が左手に見える。

のどかな風景に天庵は、大きく伸びをした。漏れたあくびの音に嶋姫が振り返り、笑みを浮かべる。

「あら、天庵様、昨晚は呑みすぎたのでは、ございませんか」

「いや、拙者、出家の身。酒などは一滴も呑んでおらぬでござるよ」  
天庵の戯れ言に、嶋姫は鬨達に笑う。

「親父殿は酒は呑みませぬが、般若湯は浴びるほど呑みますからな」

「お主こそ顔が青いではないか。未熟者め」

天庵は家督を譲った嫡男の小田守治もりはるに一喝した。天庵と同じく直垂ひたたれに折烏帽子の馬上の守治は、昨晚の酒がまだ残っているのか、顔色がよくない。

守治は、「そんなことはござらぬ」と言いながらも、口に手を当てた。

「情けない。二十と六にもなっておるのに、酒に呑まれるとは……。そんな有り様で小田城を奪回できるのか」

天庵は、大きなため息をついた。筑波の嶺の麓にある先祖代々の我らが居城——小田城が、手這坂てはいざかの合戦で宿敵の佐竹義重よししげ、義宣よしのぶ親子に奪われて、はや十年ほど経つ。小田城は九度落城しているが、八度奪い返している。あの城で往生するのが、天庵の夢だった。

「皆様、お酒とは、かようにおいしいものなのですか」

「いや、うまくないですぞ。姫は決して口にしてはなりません」

天庵の声に、嶋姫は口元に手を当てて笑う。十五歳の姫に酒など教えたら、足利將軍家の尊氏たかうじの血を引く、父の足利頼純よりすみに何を言われるか分からない。

「それではこれから向かう古河城の公方様に教わります」

足利右兵衛佐義氏うひょうえのすけよしうじ——第五代古河公方である。嶋姫にとって、はとこに当たる。

足利尊氏が征夷大將軍に任じられ足利の世を開いてから、二百五十年が過ぎた。

京から関東は遠い。尊氏は四男の基氏を、関東十か国を統べる鎌倉府長官として坂東の地を治めさせた。その職は関東平野の中心、下総国古河に移り、今では古河公方と呼ばれている。

「なりませぬ。そもそもお父上は、姫が古河を訪れることを知っておるのですか」

嶋姫の父、頼純も古河公方に連なる家系だ。嶋姫の祖父義明が、第三代古河公方の兄高基と対立して、小弓公方を名乗った。国府台の合戦で敗れ、義明や伯父の義純は討ち死にした。次男の頼純だけは、安房国の里見氏を頼って落ち延び、その庇護を受けた。

頼純——いや嶋姫に取って、今の古河公方がかつての敵のはずなのだが、嶋姫は気にしていない。

天庵の懸念の声に嶋姫は目を回す。

「だって、氏姫が一人では寂しいでしょう。まだ九つなのに、嚴つい武者たちに囲まれて遠出もままならない。せめて私がお話し相手になつてあげないよ」

現古河公方の義氏は、正室の浄光院——北条氏康の娘との間に息子一人と娘二人をもうけた。しかし、嫡男の梅千代王丸と娘一人は幼い頃に亡くなり、今は氏姫と呼ばれる幼い姫だけが残っている。公方家の血統が絶えてしまうかもしれない事態である。

嶋姫には姉と妹、弟が二人いる。

「拙者、もうお父上に隠しきれませんぞ」

「その辺は天庵様が、よしなに……」

嶋姫の笑顔に天庵は、坊主頭をかくしかかない。思えば嶋姫と最初に出会ってから、ずっと翻弄されっぱなしだ。

小田氏は八田知家を祖とする名門、関東八屋形の一つだ。天庵の父である第十四代当主の小田政治は勢力を拡大する中、家の存続のため、関東の諸侯と古河公方家の間を立ち回った。

戦いに敗れ没落したとはいえ、頼純は名門足利の血統だ。万が一に備え、頼純にも渡りを付けるため、天庵は何度か秘密裏に安房まで訪れた。

ある春の日、密議を終え帰る途中、古びた寺の境内で、老木のさくらを愛でていた時のことだった。老木の影から小さな弓を抱えた幼き嶋姫が現れた。

「頼純の娘です」と供の者がささやいた。

天庵は片膝を地面に付け、こうべを垂れた。

「そちは何者じゃ」と問う嶋姫に、氏素姓を告げたところ、「そちにとって武士とは何のために命を捧げる者なのか」と問うてきた。

童の戯れだ。適当に答えようと顔を上げたら、嶋姫の真剣な眼差しが天庵の心を刺した。

「それは名のためでございます」

「名とは家に対するものなのか、世に対するものなのか」

それは家名に対するものでございます、と答えようとして、天庵はふと思った。

果たしてそうなのだろうか。名を尊ぶのは恥を恐れるからだ。恥は先祖に対しても感じるが、生きている周りの人の目にも感じる。そうなれば世に対してもそうなのか。

「分からぬのか。わらわは知っておるぞ」

——ほう、面白い。童が何と答えるのか。天庵は嶋姫の答えを待った。

「それはな、家でも世でもないのじゃ」

天庵は眉根を寄せた。妙な気持ち湧き上がる。

「——天なのじゃ。名は天のために捨てるものじゃ」

一陣の風が吹き、さくらの花びらが嶋姫の周りを舞った。

真に意味を解して言った言葉ではないのだろう。だが、その言葉は天庵の胸を激しく揺さぶった。当時まだ出家しておらず、天庵という法号は自分一人の心にしまっていたが、天——という言葉は天庵にとって特別なものであった。

「まことに面白い。天でございますか」

「しかしまだわらわは天を知らぬ。父上が厳しくてな、他出すらままならぬのじゃ」

嶋姫の率直な物言いに、天庵は口の端を上げた。

「ならば拙者が教えて差し上げましょう」思えばこの言葉が命取りだった。

瞳を輝かせ、「武士もののぶに二言はないぞ」と言う嶋姫の顔を今もありありと思ひ出せる。

大きくなるにつれ、女だてらに武芸を究める嶋姫の、お忍びの遠出に付き合わされることが多くなつた。

今回も遠く、上野国こうずけのくにの厩橋城まやばしまでお供をした帰り道だった。一行は左手にみかも山を仰ぎつつ、山裾の林の道を進んでいる。

「それにしても左近将監殿の玉鬘たまかざらは見事でしたね」

天庵はうなずきながら、数日前の能興行を思い出す。

この度、厩橋城まで他出したのは、新しく関東御取次役となった左近将監——滝川一益かづまさの招きがあったからだ。

関東にも多大な影響を及ぼしていた清和源氏新羅三郎義光以来の名門、甲斐武田氏が今年、あっさりと尾張の織田信長に滅ぼされてしまった。二月から始まった甲州の戦いは信長の勝利に終わり、武田勝頼は天目山にて自害した。

勝頼を討ち取った一益は、戦功一番として上野一国と信濃二郡を与えられ、関八州と奥羽の公事を任されることになった。圧倒的な織田軍勢の前に関東の諸侯は人質を伴い、一益の前に続々と出仕した。

今回の能興行の場は、関東の新たな秩序確認の場でもあったのだ。

「侍大将の身ながら、あれほどうまく能を舞うとは、都の武士とは雅なものですね」

坂東武者である天庵は歌は詠むが、能までは舞わない。いや舞えない。一益は嫡男、次男を伴い優雅に舞った。

「拙者も名物はござらぬが、連歌はたしなみまずぞ」

天庵よりもうまい歌を詠む嶋姫に、天庵は無意味に胸を張った。

「同じ、おだ——でも随分と違うものですね」

「姫、またそのような戯れ言を」

嶋姫の親しみのこもった笑い声に、天庵はむきになり言い返す。

織田氏と小田氏、読みは同じだ。おまけにうわさ話では信長と天庵は同じ年——天文三年（一五三四）生まれらしい。

「公方家がまがりなりにも血統を保っているのは、拙者の忠節の賜物ですぞ」

「もちろん、存じておりますよ」

関東は公方の血の下に、離合集散を繰り返してきた。公方を補佐する関東管領の上杉氏の勢力が大きかったが、内乱などもあり争いが続いた。北条早雲から始まった北条家が力を持つと、上杉家と北条家の間を、関東の国衆は付いたり離れたりした。

より大きなものに巻かれるのが戦国の習である。京を押さえ、天下人としての道を進む織田氏に、関東諸侯は恭順の意を表している。

「ここ関東の地にも、ようやく争いのない日々が訪れるのでしうか」

嶋姫の願うような声に、天庵はうなづく。

平和な雉の鳴き声の下には、荒れ果て崩れた民家が見える。のどかな風景は一皮むけば、腐乱した死体の大地なのだ。

京においては応仁の時代から、関東においては享徳きやうとくの時代から、戦乱が途絶えることなく百年以上続いている。



「姫は、織田の旗の下に付くのもいとわず、なのですな」

「ええ、構いません」天庵の問いに嶋姫は、間髪を容れず答えた。

「たとえ公方家が滅びたとしてもですか」

天庵の意地の悪い問いに、嶋姫は眉根を寄せた。

「これ天庵、ちこう寄れ」

顔色が変わった嶋姫を見て、天庵は自らの失言を悔いたが、もう遅い。仕方がなく馬を近づける。

「お主が惜しいのは、名か家か命か」

冷やかかな嶋姫の問いが、向けられる。

「それは名——誉ほまれでございます」

——名こそ惜しけれ。恥ずべきことをしない。坂東の武者にとって当たり前のことだ。

「そして名は——」

「天のために捨てるもの、でございます」嶋姫の言葉を天庵は遮った。何百回と聞いた言葉だ。

嶋姫は苦笑いをして天庵を睨みつける。

「分かっておるのなら、たわけたことを申すな。公方家が滅びるのが天の思いならば、それは仕方がないことなの——ですよ」

幾分機嫌の直った嶋姫を見て、天庵はため息をつきながら、馬を離す。

守治の含み笑いが聞こえてくる。睨みつけると素知らぬ顔をした。

織田の旗の下に付いたとしても、何としても先祖からの地、小田城は必ず取り戻さねばならぬ。

宿敵の佐竹氏を如何に打ち負かすか……。隣で青い顔のまま揺れている守治を見た。

馬上、ため息が零れる。

せめて姫のような息子でもおれば――。

戦で鍛えた耳が異変を素早く感じとる。

右前方の薄暗い林から、徒立ちかちだの山賊とおぼしき連中が駆けだしてくるのが見えた。

「賊だっ」天庵は刀を抜き、叫ぶ。守治らの応える声と鉄の音がする。

敵の人数はこちらと同じく十数人。だが、こちらには嶋姫がいる。

抜かったか――と頭に血が上った刹那、弓の音が聞こえた。

嶋姫が侍女から受け取った弓で矢を放つ。先頭の山賊の胸に矢が突き刺さり、倒れる。

二の矢を放つ音が聞こえる。

「彦太郎、お主は姫を護れ」天庵は彦太郎――守治に叫ぶと、馬の腹を蹴り、半数を引き連れ、敵に向かう。

先を走る男の槍を刀の棟で払いのけ、一刀浴びせる。

天庵は馬上、刀を振るいながら、山賊らを蹴散らしていく。

血しぶきの匂いが辺りに漂う。

襲ってきた割には手応えがないと思った時、叫び声が聞こえた。

振り向くと、守治が護る嶋姫ら一行に襲いかかる騎馬と徒の一団が見えた。凶られた——こちらは陽動で、賊らの狙いは最初から嶋姫。

馬首を振り向かせようとしたら、馬がいななきながら前足を上げ、倒れた。

馬上から落ちた天庵は、腰を痛打し、呻き声を上げながら立ち上がる。

馬の後ろ足が斬られている。供の馬も同じく足をやられている。嶋姫の元に向かおうとする天庵らの前に、賊どもが塞ぐかのように立ちはだかる。

先ほどより人数が増えている。少人数はおびき出すための手——。

天庵は舌打ちをしながら斬りかかるが、賊どもは間合いを取り、囲みを解こうとしない。「姫っ」叫びながら、囲みを抜け嶋姫の元へ向かおうとするが、埒が明かない。

——彼奴らの目的は、はなから嶋姫なのか。

女衆の叫び声に、さらに頭に血が上る。嶋姫は馬上で刀を操っていたが、馬の足を斬られ、落馬した。賊どもが嶋姫の体に群がる。

「不届き者っ」嶋姫のくぐもった叫び声に、天庵は齒軋りをして、賊に斬りかかるが、甲冑を着ていないがゆえ、思い切って踏み込めない。

嶋姫の声が小さくなる。

もし嶋姫をさらわれたら、この老いぼれの腹を幾ら切っても足りぬ。

悔恨の念にかられる耳朵に蹄の音が後方から聞こえてきた。

新手かと絶望の思いにとられ振り向いた天庵は、迫る数騎の騎馬武者を目にした。  
「助太刀いたす」芦毛あしげの馬に乗る先頭の若武者は、そう叫ぶと、囲む賊の端を、馬上から  
刀で薙ぎ払った。

「かたじけない。向こうの女衆をお頼み申す」

天庵の叫び声に、馬上の若武者は笑みを見せて、馬に一鞭当て、賊を飛び越すと嶋姫の  
元へ向かった。

新手の登場に賊どもはうろたえ始めた。腰の痛みに耐えながら天庵は刀を振るう。

若武者は人馬一体、見事な動きで賊を斬り倒していく。

風のように若武者が舞うと、敵が一人、また一人と倒れていく。

騎馬の賊が若武者に討ち取られると、賊は一気に崩れて逃げ出した。

天庵は嶋姫の元へ急いで向かう。

若武者は馬から降り、刀に付いた血を振り落とし、懐紙で拭って鞆に戻した。

賊どもの大半は打ち倒し、残りは逃げていった。

若武者は直垂の埃を落とし、ずれた折烏帽子を直してから、座りこんだままの嶋姫の手  
を取るとほほ笑んだ。

「まことにかたじけない」天庵は痛む腰をさすりながら、若武者に声を掛けた。

若武者は天庵を見ると、頭を慇懃に下げた。

「この辺りは山賊が出ますゆえ、姫衆と共に他出するのは危のうございます」

若武者は立ち上がった嶋姫を見た。

「大過なくご無事で何よりでございます。道中馬がないと不便にございましたらうなずく嶋姫の顔は青ざめていたが、頬に赤みが見える。」

若武者は自分の乗っていた芦毛の馬を嶋姫に差し出し、供回りの者に告げ、さらに馬を数頭差し出してきた。そのまま立ち去ろうとする。

「お名前を……聞いておりませぬ」

嶋姫のかすれた声に、若武者は、はにかむように笑うと、「臯月と呼んでおります。五月に生まれた馬なので——」若武者は臯月と呼んだ芦毛の馬の首を優しくなでた。甘えるように馬がいなかった。

嶋姫は小袖の袖で口を覆い、笑いを耐えている。やがて袖を外し、腹を抱えて笑った。「……いや、失礼いたしました。馬の名ではなく。あなた様のお名前を……」

「ああ、拙者の——」若武者のあどけない驚きに、天庵を始め荒武者どもの表情も緩む。

「名乗るほどの者ではございませぬ」と頭を下げた。

「いや、ここまで助けていただいて、何も返さぬのは坂東武士の名折れでござる」天庵は若武者の前に一歩進み、声を掛けた。

若武者は天庵に正対すると、向日葵のように笑った。

「その洲<sup>すはま</sup>浜の家紋、常陸の小田氏とお見受けいたします。同じ藤原の血。お助けするのは当然でございます」

天庵は己の直垂に染められている——黒丸を三つ「品」の字のように組み合わせた洲浜の家紋を見た。

若武者の直垂には、勾玉を三つ円形に配置したような——三つ巴の家紋が見える。

「宇都宮の一族でござるか」

「支流の支流でございます」

そう言うと若武者は頭を下げ、従者が連れてきた馬に跨がった。

「下野の田舎まで本日中に戻らねばならぬため、お先に失礼いたします」

若武者は手綱を握ると、「それでは、ご免」と力強い声を出す。

「あっ——」呼び止める嶋姫の声に、若武者は嶋姫をもう一度見てうなずいた。

「またご縁があれば——」若武者は凜とした声を残し、去っていく。

若武者に従い去っていく一団を、天庵と嶋姫は黙って見つめていた。

嶋姫は両手を胸に置き、遠ざかる若武者の背を見続けていた。

皐月の風が、嶋姫の黒髪を揺らす。

雉が一声鳴いた。

「風のような御仁でしたな」

天庵の声にうなずく嶋姫は、皐月と呼ばれた馬のたてがみを、ゆっくりとなでた。

馬は甘えるかのように嶋姫の頬に顔を寄せる。

別れを惜しむかのように馬がいなないた。

平和な皐月の天高く澄み切った空に、いつまでもいつまでも、響いていた。

翌月、六月二日払暁、天下人となりつつあった織田信長は、京の本能寺にて明智光秀の謀反により命を絶たれた。

その光秀も、中国大返しを成し遂げた羽柴秀吉の前に討たれる。  
天下は再び、騒乱に巻き込まれることとなった。

(序章 了)